

だいちゃんのだいぼうけんシリーズの6
～風の末裔編～



～西風 そら～

この作品の著作権は、西風そらにあります

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>



草原を十人程の子供達が、野駆けしている。先頭の馬に跨った子供は、三つ又の棒を頭上に掲げている。

棒の先には縄を巻いて作った鞆が挟まっていて、皆でそれを奪い合う遊びをしているんだ。

先頭の馬が、何も無い平地なのに、大きく跳んだ。後に続く馬達も、同じ場所と同じように跳ぶ。

子供達は特に気にしない。草原を走っていたら、よくある事なんだ。馬が勝手に目に見えない何かを避けるのは。

「ふう……」

「行っちゃったね」

「ああ、びっくりしたあ」

草原に臥せていただいちゃん、風すつか、柿ただちゃんは、馬の去って行った方向を睨みながら、起き上がった。

「いきなり走って来るんだもん」

柿ただちゃんは、食べかけシチュー皿に入ってしまった草をよけながら、

「まったく失礼しちゃうわ、レディの食事中に」

とぶつぶつ言った。

「やっぱり、ちょっと南にくだると、色々賑やかないね」

だいちゃんは、死守したシチュー鍋の蓋を開けて、三人の皿に芋とキャベツを均等に配った。

「大陸は、昔っから、風が歴史に大きく関わって来たんだよ、楽しみだなあ」

風すっかが、さっきまでしていた話の続きを始めた。

シベリアを西に進んでいただいちゃん一行だが、せっかくだから世界一高い山を昇ってみたい、という全員一致の意見で、進路を南西に変えたのだ。

「あ、また来たよ」

さっきの馬群がまたやって来る。今度は先頭の子が入れ替わっている。三人はそれぞれのお皿を庇いながら、草原に臥した。

「あれえっ」

馬群の様子がさっきと違うのに気付いた。後ろの方に、妙にピョンピョン飛び跳ねるおかしな馬が、五頭ばかりくっついてる。

それは、人間の駆る馬と明らかに違った。四肢が長くて柔軟で、キラキラ光る鈴を首に下げている。

目を凝らしてよく見ると、なんと馬は草で編まれていた。ワラ馬というのがあがるが、あれを青い草で、細かく精巧に編んだ



感じた。それが命を持って、地面よりほんの少し高い所を、パカパカ走っているのだ。

背中には、人間の子供と変わらない大きさの妖精の子供が、一人か二人づつ乗っている。楽しそうだから、多分一緒になっ
て遊んでいるんだろう。

人間の中でも、とりわけ小さい子には見えているみたいだ。
笑い合ひすらしている。多分大きくなると忘れてしまっただろ
うけれど。

「何の妖精だろう、楽しそうだったね」

「風の妖精かもしれない、あの草の馬、空中を跳ぶように走っ
ていたろう？ 何となくそれっぽい」

「そういえば、樺太に来て以来、こっちの風の妖精さんに会わ
ないわね」

「うん…存在はしているけれど、進んで他種族と関わらないん
だと思う。ほら、ボクらの土地でも、風の妖精が見えるのは、
関わりのある種族だけだったでしょ」

だいちゃんは、お祭りに関わって初めて風すっかが見えた事
を思い出した。

「今、見えたよね」

「飛び越してっただからかなあ？ 遊んでいたからかもしれない
し…。何にしても、ボクはあの馬が気になる」

「僕も気になる」

「どーして？」

柿ただちゃんの問いに、風すっかとだいちゃんは声を揃えて
答えた。

「カッコいいじゃん!!」

風すっかが言うには、今が風の妖精だとしたら、草の馬は
風袋みたいなものらしい。

それを聞いてだいちゃんは、一つの想いが頭をもたげた。風
すっかや柿ただちゃんが風袋で自在に飛び回るのを、こっそり
密かに羨ましいとは思っていた。けど、自分は身体のサイズが
違うのだからと、考えないようにしていた。

この地の風の妖精が大きいサイズで、あの馬なら自分でも乗
れるかも…。何だか急に、抑えていた願望がむくむくして来た。

だいちゃんは、秩父から新潟まで空を飛んだ事はある。でも
あの時は、大勢の風すっか御一行の中だったので、大きな乗り
物に乗った感じで、飛翔感はあまりなかった。

「ねえ、風すっか」



「うん？」

「あの子達は、頼めば僕に草の馬の乗り方を教えてくれるかしら？」

風すっかはいちちゃんの質問を予見していたかのように、気の毒な顔で即答した。

「NO、だな、風の精が風袋を他の種族に貸すなんてあり得ない。乗り方を教える事もNGだよ」

「だ、だって、柿ただちゃんは…」

「特例中の特例だよ、兄ちゃんとボクが…これは反省すべき事なんだけれど、柿ただちゃんにこっそり風袋の操作を教えちゃったから。中途半端に風袋に乘れちゃうのは、実はメチャメチャ危険な事だったんだ。だから、仕方なく、大人達が徹底的に特訓したの」

「だいちちゃんがシュンとしてしまったので、柿ただちゃんが急いで言った。」

「独りで自由に飛ぶのは無理として、頼めばタンテムしてくれないかしら？」

柿ただちゃんだって、飛ぶ楽しさをだいちちゃんに味あわせてあげたい。

「ん…ん、相手によるねえ…、風の精ってのは、個別に掟が

あるから…。でも、まあ、気の良さそうな子供達だったよね…」

「大人も気が良いといいわね」

三人は昼ご飯の片付けをして、それぞれの荷物を背負った。

「あら…」

「どうしたの？ 柿ただちゃん」

「ふっふ、何かの導きかしら？」

柿ただちゃんは何かを草の間から拾い上げて、だいちちゃんに渡した。枇杷むわくらしいの大きさの金の鈴。さっきの草の馬が首に付けていた物だ。近くで見ると、綺麗な細工模様が彫られていて、それがキラキラしていたのだ。

「落とし物を届けてあげた親切なヒトの願いなら、少しくらい聞いてくれるかもよ」

「え…確かに…嬉しいけれど、ちょっと図々しくない？」

「たまには図々しくなってみるのも、人生の新しい扉を開くわよ」

人生論になってしまった。しかしまたとないチャンスには違いない。風すっかも、肩をすぼめて頷いた。

だいちちゃんは人生の新しい扉を開くべく、指し差し笹舟を取り出した。

指し差し笹舟に鈴の音を聞かせると、くるりと回って、鈴の帰るべき場所を指し示してくれた。

三人は笹舟に従って、テクテク歩き始めた。

「風すっかの館みたいなのに、立派な屋敷があるのかしらん？」

ちりん…ちりん…と鈴の音が高原に響いて吸い込まれていく。

それは、幻想的な音色で、三人も音と一緒に吸い込まれるような気がした。

小高い丘を登る途中で、地平線に一頭の草の馬が見えた。馬の足元に子供の妖精が一人、手綱を引いて歩いている。

泣き出しそうな情けない顔で、足元をキョロキョロしながら、来た道を引き返している。馬の首輪の革が干切れて、鈴がなくなっていた。

「……………」

「だいちちゃんは、柿ただちゃんと風すっかと、顔を見合わせた。二人とも困り顔だ。だいちちゃんが鈴を掲げて、振った。チリチリいう音で、妖精は顔を上げた。リンゴみたいな頬の女の子で、空と同じ色の髪と目をしていゑ。」

「君の？」

「……………」

「そこで、拾ったんだ」

「……………」

「え…と…これ、探していたんじゃないの？」

妖精は鈴を見つめて、思いつめた顔をした。

「君の…だ…よ…ね…」

妖精はやっと頷いた。

「じゃ、はい、返すよ」

妖精はだいちちゃんとの間に分厚い垣根があるかのように、うんと手を伸ばして、鈴を掴み取った。

そして、何も言わずに背を向けて、慌てた感じで馬の首輪に鈴をくくり付けた。途端に草の馬は生氣を取り戻し、さわさわと風をまとう。

妖精はひらりと馬に跨り、一足飛びにだいちちゃん達から遠く離れた。そして、チラリとだけだいちちゃんを見つめて、何も言わずに走り去ってしまった。

三人は唾然として突っ立っていた。大した事を期待した訳でもないけれど、何だかあんまりだ。

風すっかと柿ただちゃんも、だいちちゃん程ではないけれど、



「草の馬に興味があったのに。」

「…まあ、並外れてストイックな種族だって事だ。草の馬に乗せてって頼むどころじゃなかったね」

風すっかは、はい、この件はこれでおしまい！ という風に言った。

「ねえ、風すっか、僕、やっぱり諦めきれない。ダメ元でもう一回だけ試してみたい？」

一度、希望が芽生えたせいで、だいちゃんは余計に思いが募ってしまった。

柿ただちゃんがあらまあ、という顔で頷いた。だいちゃんが自分の欲望をここまで主張するなんて珍しい事だ。

「はい」

風すっかも柿ただちゃんと同じ気持ちだった。

「笹舟、笹舟…、僕、一度でいいから、草の馬に乗ってみたいの。行くべき方向があったら教えて」

普段の笹舟は、こういう願ひ事系に対しては動かない。しかし、だいちゃんの執念が通じたのか、ピタリと一方向を指した。

笹舟が指し示す方向に歩いて行ってみると、…沼だった。

「……だいちゃん…」

「…僕は行くよ」

「危ないわよ、どう見ても沼よ」

「もしかしたら、沼はカモフラージュで、風の妖精の館があるかもしれないじゃないか」

「だいちゃんは、雲にカモフラージュされた風すっかの館を思い出した。」

「んー、気配は感じないけれど…、ボク達は岸で見ているよ。危ないと思ったら引き返してね」

「だいちゃんは沼に一歩踏み出した。意外に浅くて、足の甲すら濡らさなかった。どうやら本当にカモフラージュかもしれない。」

「ドキドキしながら、一歩一歩…、沼の中頃まで進んだ。と…、だいちゃんの姿がふっと消えた。」

「カモフラージュされてた異空間に入り込んだ、…のではなく、沼がいきなりの深みになっていたのだ。」

「うわっびびびび…！」

「だいちゃん！」

「風すっかはあわてて助けに行こうとした。しかし、二人の頭上を大きなストライドで、先程の馬が駆け

抜けて行った。空色の髪の妖精が馬上からだいちゃんに白い手を差し伸べる。」

「そうか、そういう事だったのか！」

「ある意味お約束ね！」

「二人は安心して事の成り行きを見守った。」

「妖精がだいちゃんを無事馬の上に引っ張りあげ…たと思っただら、引っ張り過ぎて、自分が馬の反対側から沼に落ちこちてしまった。」

「慌ててだいちゃんが妖精を引き上げるが、こちらも泥だらけで滑って、また反対側に落ちこちる。お互いが引っ張りあげあって、すったもんだした挙げ句、二人してどぶーんと沼に落ちこちた。」

「そして、浅い所を歩いて来た柿ただちゃんと風すっかに、両脇から助けられ、何とか落ち着いた。」

「えー…助けてくれて有難う」

「だいちゃんの形をした泥狸が、白い目だけをパチクリして、やっぱり泥団子になった妖精を支えながら言った。」

「……………」

「妖精は息切れしてフウフウしているが、やはりダンマリだ。」

柿ただちゃんが、水筒の水で手拭いを濡らして、妖精の顔を拭いてあげた。

「私、柿ただちゃん、柿の木の妖精よ、遠い東の国から冒険してきたの。だいちゃんを助けてくれて有難う。貴方は、この土地の風の妖精さん？」

「… ガウ…」
女の子の妖精は、消えそつな細い声で言った。

「ん？？」

「チガウ……。ワタシ、『風の末裔』の種族……」

「カ・ゼ・ノ・マ・ツ・エ・イ？」

風すっかにも初耳らしい。

「んかね、僕はだいちゃん、こっちは風すっか、東の国の風の妖精だよ。僕達三人で旅をしているんだ。それで、もし…もしよかったら、君の名前も教えて貰えるかしら？」

「…ワタシの名は、まだない…。今は、ガガと呼ばれる者…。草原の風と大地を仕切る、風の末裔、蒼の一族…」

「風の末裔？ 蒼の一族…？ でも風の妖精でもあるんだよね？」

「……………」

「あの…あのね、ガガ、君の馬、とってもカッコいいって思ったんだ、それでね…」

「あっ……………」

「え？ 僕、…え？」

「近付いている…」

妖精は空を見上げて、自分の馬を引き寄せた。

「ワタシ、行かなきゃ、貴方がた、沼地の中から動いては駄目」
ガガと言う名の妖精は、あつという間に馬を駆って行ってしまった。

「従った方がいいと思うよ。あの子、嘘を言っている感じじゃなかった」

「でも…」

「また逢えるわよ、縁が出来たもの…あっ？」

ガガが走って行ったのと反対方向に砂埃が立ち、何か大勢のモノが来る。地響きとともに現れたのは武装した騎馬の人間達だった。

騎馬は沼を避けて、ズシズシと行進する。何だか、鎧や馬具が時代劇じみている。

「昔のモンゴルの兵隊さんみたいね……何かの撮影？」

人間の家の庭に生えている柿の木に住む柿ただちゃんは、テレビを見る機会も多い。

「そんな感じじゃない、ボクの勘だと、…本物だ」

風すっかだって、人間の文化は熟知している。

「この人間達の迫力は造り物じゃないよ。つまり、この土地のどこかで、戦いくさがあるんだ」

「……………」

長い騎馬の列が過ぎ、踏み荒らされた地面と物々しい雰囲気の中に三人がぼつんと残った。

「どっしょよう…」

「一刻も早くこの地を離れるべきだよ。人間の戦なんかに関わつたらろくな事にならないよ」

「そうね…」

三人が立ち上がった時、馬蹄の音が響いて、騎馬が数頭駆けて来た。よく見ると、二人の小さい子供がしがみ付いた裸馬を、追いかけて回している。

なんてこった！ 進路にあった平和な住民のパオを襲ったんだ！ 大人は、いの一歩に子供を逃がしたんだろう。

そんな子供を追いかけるなんて…！ 風すっかが風袋を吹かし、柿ただちゃんは泥団子を掴んだ。

その時……………!!

ヒュンヒュンと風切り音がし、六、七頭ばかりの草の馬が空から降って来た。

さっきの、子供の妖精の乗った馬より一回り大きい、立派な馬だ。乗っているのも大人の風の精だろう。隊列を組んで、素晴らしい動きだ。

草の馬の隊列は人間の騎馬群に突っ込んだ。人間に草の馬は見えないのだが、馬は怯えて立ち上げて暴走し、兵隊を振り落としてしまった。

別の草の馬が子供の乗った馬と併走する。するとその馬は宙を飛ぶように、あつと言う間に彼方へと運ばれて行った。

だいちゃん達は茫然と眺めていた。そして、だいちゃんの憧れはますます強くなってしまった。

草の馬の群れの中から二つ車輪の馬車が現れ、だいちゃん達の方へ飛んできた。馬車の前を先導するのは、まだ泥団子の方だ。馬車とガガの小さい馬は、三人の前の空中で停止した。

「この方々か？」

御者の質問にガ力は頷いた。

「今世でない、別の世から来られたのは。長がお逢いしたいと。」

「どうか我が里にお越し下さる？」

今世？ 別世？ よく分からないが、なんだかややこしい事になっているのは確かだろう。三人は頷き合って馬車に乗り込んだ。

「あっ」

「どうしたの？ 柿ただちゃん、早く詰めて」

「だいちちゃんは乗っちゃ駄目」

「えー？ どうして？」

「そんなに泥狸で、馬車を汚しちゃいけないわ。…そう、貴方、ガガちゃん、貴方ならもう泥団子だし構わないでしょっ？ だいちちゃんを乗せてあげてくれないかしら？」

図々しさは人生の新たな扉を開く。

だいちちゃんにとって初めての体験だった。

草原がもの凄い速さで足の下を流れていく。ガ力が草の馬を加速する度に、お尻の穴がキュウツとすぼまる。

走り出す前に、危ないから自分にしっかりと抱きついてるようになって言われた。恥ずかしくてそんな事出来ない、とその時は思った。けど、今は照れてる余裕なんかなく、ガ力にしがみついている。

はっきりに言って、めっちゃめっちゃ怖い!!。唸る風がだいちちゃんを草の馬から引き剥がそうとする。風すっかも柿ただちゃんも、こんな怖いことやって、いつも涼しい顔してんのか？

だいちちゃんに出来る事は辛うじて、歯を食いしばって、情けない悲鳴が漏れないようにする事だけだった。

二輪の馬車にゆったり収まった風すっかと柿ただちゃんは、

御者さんに色んな事を教わった。

風の末裔の一族、別名、蒼の一族。子供のうちはガガとかシシとか、借りの名前で呼ばれていて、大人になると然るべき名前を授かるってのは、風すっか族と似ている。

『風の末裔』って何なのか、二人がずっと気になっていた疑問も、すぐに答えて貰えた。

風の末裔って、歴史に残るような優れた名馬の事を、そう呼ぶらしい。『風を先祖としたか…と思える位、飛ぶように馳せる素晴らしい名馬』の妖精って事だ。



日本から来た二人にはピンと来ないが、この土地では馬は、酸素のように水のように友達のように、欠く事の出来ない大切な存在なんだ。その妖精がこの地の風や、諸々の自然を仕切っている。二人は一生懸命理解した。

「まあ、通称の、蒼の一族でいいですよ」

そっちの方が分かり易い。ガガのような子供は、透けるような白い肌に、淡い空色の髪と目をしているが、大人は少しは肌の色があって、髪の色も濃い。

「さっき、戦支度の騎馬隊を見たんだ。この地で戦があるの？
そして…今、この土地の人間の長は誰？」

風すっかが本題を聞いた。まさか、まさかね……？

「この間まで、イエスゲイ・バートルという人物がこの土地の遊牧民族をまとめて統治していたのですが、その方が鬼籍に入り、後ガマを狙う人間達で混沌としているのです」

「……………」

どうやら、やっぱり、いつの間にもやら、タイムスリップって奴ですかーいっ!!

蒼の一族の住処は草原の真ん中であつた。周囲を草の垣根で

囲った円形の部落で、大小様々なバオの集合だ。

放牧地や小川も流れていて結構な広さだが、結界に護られていて外界から見えないという。

地上を馬で駆けていると、気付かないでするりと通り抜けてしまう。上空からしか入れない護りが働いていた。

草の馬の一行は、中庭みたいな所に降り立った。

だっちゃんは何とか馬から降りたが、フラフラと尻餅をついてしまい、ガガに支えられた。

「楽しかった？」

柿ただちゃんが無邪気に駆け寄ってきた。

「一生分の飛ぶ楽しみを味わった感じ…、しばらくはもう、いいです…」

風すっかが、そりゃ凄い、今度は僕も乗せてね、と言っつのに、ガガは真面目にコクンと頷いて、さっさと自分の馬を引いて行ってしまった。

だっちゃんが貰った手水で体の泥を落としている間に、二人は御者さんから聞いた話をした。

「タイムスリップ？…まさか…」

しかし、あの時代がかった騎馬隊は、そう考えるしか説明がつかない。

「考えられるのは鈴を拾った後ね。あの時、何か不思議な感じだった」

「じゃあ、こいつの仕業？」

だっちゃんは指し差し笹舟を取り出して覗みつけた。

「西暦一〇〇年代…の、前半だと思っわ」

いきなり具体的な数字を言う柿ただちゃんに、風すっかもびっくり目で振り返った。

「凄いね、あの騎馬の服装とかで分かるの？」

「え？ ううん、だって……」

「身支度は整いましたか？ では、こちらへ」

さっきの御者さんが来て、話は中断した。

三人が案内されたのは、中央の一番大きなバオだった。

中は贅沢ではないけれど、上品で歴史を感じる装飾品が掛けられ、奥の大きな机の前に、長らしき人物が立って出迎えてくれている。

長というからお爺さんを想像していたけれど、中性的な綺麗な若者だった。白い法衣をまとい、濃い群青の長い髪が腰まですっと流れていて、裾の方に沢山の玉飾りが揺れている。

「ようこそお越し下さいました、私は風の末裔の一族を束ねる



者。どうぞ座して下さい、東の国の、ここではない世から来られた御客人」

三人は導かれて丸コザの上に座った。長も円座になる形であぐらを組んで座った。

それを見て、だいちゃんと風すっかも、安心して足を崩した。

柿ただちゃんだけは、不自然に緊張してかしまっている。

「この時代にはない紋様の鈴を持った者が現れたと聞いた時、それは何かの力が働いて、時の垣根を越えて、この荒れた時代を正してくれる者が現れたのだ、と確信したのです」

三人は丸コザから座ったままの姿勢で飛び上がった。

「まままま待って下さい…!!」

「イタイイタイイタイイタイ…!!」

柿ただちゃんが足が痺れてひっくり返っている。

この醜態を見て、『荒れた時代を正す救世主』なんかじゃないって思い直してくれればいいんだけど……。

三人は自分達は救世主なんかじゃないって百回強調してから、蒼の長の話聞いた。

この地は少し前まではイエスグレイ・バートルという首長が統

治していた。遊牧民のコミュニティはそれぞれに独自の法を持ち、頑固だったが、それらをまとめて統べる事が出来たんだから、良く出来た人物だったんだろう。

「人の長と蒼の一族は代々交流がありました。この土地では人も、風や大地を味方につける事は大切な事でしたから」

「人の長は、大人になっても、蒼の妖精を見る事が出来たんですか？」

「見えなくても存在はわかっていましたし、小さい子供に仲介させる場合もありましたね。しかし、イエスグレイ・バートルは、人外を見る事が出来たし、話も出来ました。私の先代の長とですが」

「へえ、本当に凄い人だったのね」

「しかし先代の長が寿命で私と代替わりした時、折り悪くイエスグレイ・バートルも没してしまっただけです。私達と人間の交わりが途切れてしまって、人間は権力争いで荒んでしまいました。私の力及ばない事も原因ですが…」

「そんな事はない!! 風の妖精が、人間が勝手に戦うのに責任を感じる事なんてない!!」

風すっかが珍しく大声を出した。

「あ…ごめん。でもさ、自分達で勝手に争いをして、風

が悪かったとか、神が味方してくれなかったとか。：元凶は自分達の欲なのに。欲が過ぎるとますます僕達との関わりが遠くなるの」

蒼の長は寂しげに微笑みながら、風すっかの言葉に頷いた。「その通りです、今争っているどの種族も、私達の声を耳に入れては貰えませんでした。もう、私達にはどうする事も出来ません。せいぜい、未来ある子供達に手を差し伸べるくらいで」

若い長は苦悩していた。三人は黙ってしまった。本当に自分達が救世主だったら良かったのに……。

あの鈴、本当は別の、本物の救世主になるべく者が拾うはずが、間違って先に拾ってしまったんじゃないだろうか？

しゅんとしてしまった三人に、蒼の長は鈴を取り出し、優しく言った。

「この鈴には、蒼の一族の紋様文字で、今より未来の事が描かれています。貴方がたが別世から来たのは間違いありません。すぐに答えをお持ちとは思いません。私達も力を尽くしますから、一緒に考えて下さいますか？」

「……僕達にそんな大それた事が出来るとは思えません。だけど、出来ないって決めつけても、何にも生まれない。出来る事

を一生懸命考えます」

だいちゃんは正直な気持ちを言った。二人も同じだった。

「あの……」

だいちゃんがおすすり切り出した。

「はい？」

「と言う事は、その鈴はガガちゃんの落とした鈴とは違ったんですね」

「そうです」

「じゃあ、ガガちゃんは困るでしょう。草の馬につける鈴、凄く大切な物そうだったし」

蒼の長はだいちゃんを正面から見てゆっくり言った。

「そうです、とても大切な物です。だからつい貴方がたの持っていた鈴を受け取ってしまったのでしょ。いけない事です。

大人に見つかって、正直に告白したのは誉められますが、あの子供は、もう一度自分の落とした鈴を探しに行かねばなりません。鈴を見つかるまで部落には入れません」

「ええっ！」

「そんなんっ！」

「もうお外は真っ暗よ！」

長は今度は風すっかに向き直って言った。

「貴方がもし風袋を自分の落ち度でなくしたら、貴方の一族は罰を課すでしょう。その時貴方は理不尽に思いますか？」

「思いません、罰を受けます」

即答だった。

「でも、ボクがそうになったら、きつと兄ちゃんが手伝ってくれる。ガガちゃんにはボクが手伝いに行きます、いいですか？」

「ほ…僕も行きます、友達が困ってる時じっとしているなんて、出来ないです」

「ただちゃんも行く!!」

蒼の長は、三人を見つめて穏やかに頷いた。

ドタドタと出て行きかけて、だいちゃんが長の前に戻って来た。

「あの…あのね、ガガちゃんは最初、自分のだって言わなかったの。僕が勝手に強引に、ガガちゃんのだって決めつけちゃったの」

三人が慌ただしく出て行った後、しんとなったパオの中で蒼の長は鈴を手リンと鳴らした。

「この土地の大いなる行く末より、目の前の困っている友達か。

鈴よ、あの三人はこの土地に、私達に、何をもらしてくれるんだろうね…?」

金の鈴には、別世の東国から来た三人が、混沌とした時代に光を導く絵物語が描かれていた。

ガガは自分の愛馬を引いてトポトポ歩いていた。蒼の里は徒歩で出る事は出来るが、入るのは空からでないといけない。つまり、草の馬に生気を吹き込む金の鈴を見つけないと、住処おうち(に)帰れないのだ。

「自分で遊んでいて落としちゃったんだから、仕方ないんだけれどね…」

風間、鈴を届けに来てくれたヒトに逢った時は、嬉しかったナア。でも自分の鈴じゃなかったから、ガツカリしちゃった。

悪い心が湧いて、つい受け取っちゃったけれど、バシるのが怖くて逃げ出した。せつかく届けに来てくれたのに、悪かったナア。

この鈴を落とした子が困っているかもしれないって思い直して、すべにさっきの三人を探したら、沼で溺れているんだもん。びっくりしちゃった、何であんな沼地になんか入ったんだろ

うっ。

人間の怖い兵隊が来て、「ワタシのお友達がいるパオの方向に行ったから、慌てて大人のヒト達に助けを求めに行った。そしてたらずぐ、自分の鈴じゃないってバシっちゃった。

何だか鈴の事で騒ぎになったけれど、ワタシは人間のお友達を助けたくて必死で訴えた。

大人のヒト達が動いてくれて、あの子達、逃げられたけれど、お父さんお母さんと離れ離れになっちゃった。別のパオの家族に拾われたらしい。優しいヒトだといいな、無事生きて行けたらいいな…。

遠くで狼の声がして、ガガは身震いした。妖精は狼に喰われる事はないが、夜の獣は精気を吸い取るのだ。

いきなり近くでカサガサ音がした。

「ひっ！」

ガガは頭を抱えて縮こまった。

「大丈夫？ ガガちゃん？」

さっき後ろに乗せた「ト」。

「怖がらせちゃ駄目じゃない」

空からふわりと風の精が柿の精とタンテムで風袋に乗って降

りてきた。

「ボク達も探すの、手伝うよ、金の鈴」

「どの辺りで落としたの？」

「みんなで探せば、すぐに見つかるよ」

「え……でも……」

「でも？」

「ワタシが受けた罰だから……」

「じゃあ、僕も罰だ。あの鈴を届けたら草の馬に乗せて買えるかも、なんて小賢しい事考えた罰」

「私はそれをそそのかした罰」

「ボクは……えーと、夜中にお腹が空いて、こっそり「ケモモのジャムを舐めちゃった罰……、かな？」

「あーっ、あれ、風すっかだったの？ 道理で妙に減ってる……」

「だってお腹空いてしょーがなかったんだもん」

「晩御飯しっかり食べないでお菓子ばかり食べてるからよ!!」

ガガは唾然と三人を眺めていたが、つい、吹き出してしまった。

「ほらあ、笑われた」

ガガの馬が急に力をなくした辺りを四人でくまなく探してみ
たが、どこにも見つからない。

「誰かに拾われたのかも知れないね、人間の騎馬も通ったかも」
ガガは思いつめた顔になる。

「そういう事ならこれ、使ってもいいと思うんだ」

だいちゃん是指し差し笹舟を取り出した。今日は大活躍だ。

「ガガちゃん、手を出して」

不思議そうに差し出された手に、笹舟を乗せて、だいちゃん
は言った。

「なくした鈴の事を強く思ってみて」

ガガが素直に目を閉じると、笹舟はクルンと回った。

「あっちだ」

しばらく歩くと、丘を背にして、人間の街があった。パオで
はなく、定住の石造りの家と、城壁付きの城まである、大きい
街だ。

「どっしりよう」

「人間にボク達は見えない筈だ、入っちゃおうよ」

「……………」

「どっかした？ ガガちゃん？」

「ん……あの、城壁の辺り、何だか凄く嫌な感じがする……」
「……」

ふいに、後ろでチリンチリンと音がした。

「やあ、あんた、蒼の一族？」

びっくりして振り向いた四人の目に映ったのは、少し痩せた
人間の少年だった。

人間の少年は十五、六くらい……妖精が見えるにしては、年
が行き過ぎているようだ？

「これ、探しに来たんだろ？」

少年は鈴をチリチリ振って見せた。

「何も悪さしないよ、受け取れよ」

少年はすいと進み出て、ガガに鈴を差し出した。鈴とは別の
金属音がした。柿ただちゃんが小さな悲鳴を上げた。

少年の手足は鎖で繋がれていた。ガガは三人程には驚かなか
った。悲しい事に、見慣れているのだ。

「貴方は？」

「まずは受け取れよ、昼間、石切場に連れてかれる時に拾った
んだ」



少年はよく見ると傷だらけだ。こんなに傷だらけなのに、何でこんな燃えるような目をしていられるんだろう。

「いっぺん逢いたかったんだ。親父とはたまにしか会えなかったけれど、あんたらの話はよく聞かされたから」

ガガの空色の目が感動で溢れた。

「貴方…、貴方…」

「長ってヒト、元氣？ 親父のサイコーの夕子だって」

「長は…亡くなったわ、前の長は…。でも、今の長がきつと貴方に逢いたいわ！ 今すぐ連れて行くわ！」

「あー、駄目！」

「どうして？」

「俺は一人じゃない、同族が同じように捕まっている。一人脱走すると…分かるだろう？」

「……………」

「俺はただ、親父が話してたあんたらに、逢ってみたかっただけなんだ。それに、もう戻らなきゃ、…ほら、受け取って」

少年は鈴をガガに押し付けた。

「あ…あのがとう…」

途端に少年が頓狂な声を上げた。

「あれえ？ 一人だと思ったら、チビッコイのが、あと三人い

たー！」

そうか、だいちゃん達も鈴探しをしていたので、返してくれた事で、関わりが出来たのか。

「ふーん、不思議なもんだな。ふふふ、あんたら見ると、人間の世界なんて狭っちくて、ちっぽけだって思えるぜ。俺の境遇だってな。心配しなくていいよ、あんたらに逢えて、また心が強くなれた」

少年は石の冷たい街に、元気に戻って行った。

「長に…長にすぐ報告しなくちゃ」

「どうしたの?」

「ああ、やっぱり貴方達、救世主だわ、凄いヒトの所に導いてくれた! イエスグイ・バートルの息子が生きていた!!」

「あの子が前の首長の息子? なのに、あんなに鎖を付けられているの?」

「人間の権力の誇示の仕方…。征服した相手の身内を…大概、子供とか弱い者…。酷い目に合わせて見せつける事で、征服した民族の誇りを奪い、他の敵に対する威嚇をするの」

「……………」

「イエスグイ・バートルは自分の子供達がそうなる事を恐れて、草原より離れた地に暮らさせていたって聞いていたけれど。捕まってしまったのね」

話しながら、ガ方は馬の首の革飾りに、鈴をくくりつけた。馬は首を上げ、さわさわと風をまとった。柿ただちゃんが裁縫道具を出して、革の千切れた所をしっかりと補強した。

「これで大丈夫よ、さあ、早く蒼の長さんに知らせに行きましょ」

風がザワザワと、不穏な空気を運んで来た。風の精でないだいちちゃんにも分かる程、悪い風が吹いている。

「なに?」

風すっかが偵察に上昇する。

「ああ!!」

「どうしたの?何か見えた?」

「人間の騎馬隊だ。松明も持たずに行軍している」

ガガも馬を駆って、風すっかの所まで登った。

「この街の兵隊なら明かりを持たずに、こんな夜中に近付く…、なんてしないよね?」

「あの旗は別の部族だわ」

「夜襲……？ 戦……？」

「だいちゃんが唸った。」

「イエスゲイ・バアトルの残党って事はない？ 首長息子を助けに来たって事は……」

と、柿ただちゃん。

二人が上から降りてきた。

「ううん、違う部族。侵略に来たんだと思う。イエスゲイ・バアトルの息子は権力誇示の道具として、また酷い目に遭わされる……」

「どっしりようー！」

「ワタシには無理！ 長に知らせに行かなくては……！」

「うん！ ガガちゃんは、じゃあ、急いで」

「え？ 貴方がたは？」

「イエスゲイ・バアトルの息子を護る……！」

「そして、出来れば逃がす……！」

「もし、可能なら、奴隷として捕まっている他の皆さんも……！」

三人は誰に指示された訳でもない、自分のやる事を、当たり前みたいに掴んでいた。

「……………」

「どっしりしたの？ 早く……！」

「……ワタシが残る！ 風すっかさん、申し訳ないけれど、貴方が知らせに飛んで……！」

「え？ だって……」

「いざという時、ワタシの馬ならあのヒトを乗せて飛ぶ事が出来る……！」

その通りだ。蒼の妖精の子供はチビ子だが、大人は人間と変わらないし、馬もそつだ。ガガの馬は小さめだが、あの痩せた少年を乗せるには差し支えないだろう。

風はますますざわついて、悪いモノの接近を知らせる。

「じゃあ、柿ただちゃん、ボクの風袋で、行って……！」

「えーっ……！」

「ボクは風袋がなくても少しは飛べるんだ。残って働ける……」

「……分かった……！」

さすがの柿ただちゃんも、ここで駄々をこねる程、お馬鹿じゃない。ピュッと一閃、夜空に舞い上がった。

「あっ……ああああっ……！！」

三人は思いも寄らない事で叫び声を上げた。街の真ん中の城壁から、真っ赤な塊が数個舞い上がったのだ。

それは、夜空を駆ける炎の狼だった。紅蓮の尾を引きながら、



柿ただちゃんが飛び去った方向に追いかける。
「柿ただちゃん!!」

「大丈夫!」

ガガが馬に乗りかけるのを、風すっかが制した。

「あの程度のスピードなら、マックスの柿ただちゃんなら軽くぶっちぎる」

案の定、風袋はあっと言う間に見えなくなつて、赤い狼は諦めて城壁の上空に戻り、旋回を始めた。

「ワタシだったら、追いつかれていたかも…」

ガガは身震いした。

「あれ…、何なの?」

「分からない。初めて見た。でも、凄い、邪を感じる」

「人間が操っているの? 呪術師でもいるのかな? 何にしても厄介だ。奴ら、ボク達が見えるぜ」

三人は街の外壁沿いに、端っここの死角に移動した。そこから、そおっと塀を越えて、街中に入った。

「ねえ、風すっか、マックスの柿ただちゃんって、そんなに速

「の。」

「純正風袋同士で勝負したら、ボクどころか、大人の風すっかだっつてそうそう勝てないだろうね。悔しいから本人には言っていないけれど」

「ふふ……」

ガガが笑ったので二人はびっくりしてドギマギした。

「え……なに、なに？」

「貴方達、本当に仲良しなのね。お互いの事が分かっていて、信頼し合っつて」

「え？ えええー！ 柿ただちゃんの突発行動なんて、全っ然分かんないよー！」

「そうだよ、ガガちゃん。帰ったら、その辺、膝付き合わせてじっくり話してあげるー！」

「ふふふ……、はいはい」

人間達には三人は見えない。三人は何とか奴隷の収容場所がありそうな貧民窟にたどり着いた。

そのタイムミングで……！

——ヒュンヒュンヒュン——

無数の火矢が夜空を彩った。

「強襲だー！」

はじまった……！ こちらの城壁内も慌ただしく動いて、「反撃の投石と矢が射かけられる。」

城下の一般民も右往左往だ。ドサクサに紛れて、さっきの少年を逃がす事が出来ればいいんだが。

「侵略に来た方が勝ってくれば、最悪、彼一人しか逃がせなくても、残った仲間の人は咎められないかな？」

「うん、でも、さっきの口振りだと、一人じゃ逃げないよ、彼」
「そうね、あのヒト、絶対仲間を見捨てないって思われているから、ああいう風にくらうくらう出来ているのかも」

「それにしても、あの炎の狼、何をやっているんだろう？ 柿ただちゃんの事はすぐ追いかけた癖に、敵の騎馬隊は攻撃されるまで放ったらかし……あ、あれね？」

「どつしたの？ ……あっー！」

三人は城の上空を見上げて、息を呑んだ。さっきは数匹だった狼が、数十匹に増えている。

相変わらず不気味に城の上空を旋回しているが、時折一匹づつ急降下しては、飛んでくる火矢を喰らっている。

喰らった狼が炎を増して上昇し、花火みたいに分裂して数を

増やしているのだ。

「何なんだ？ あの生き物?!」

「ガガちゃん、分かる?」

「分からない、でも…、戦の、憎しみのエネルギーを食べて増える害獣? そんな存在、習った事、あるかも」

「あるかもって…」

「覚えていないわよ。ワタシ、その…、勉強はちよっぴり苦手なんでもん」

「古い日本の戦場いくさばにもそうというのがいたって聞いた事がある。日本では龍とか鬼とかで、狼じゃないけれど」

風すっかが、助け船を出すように口を挟んだ。

「だから、戦争ってやめたくても止まらなくなっちゃうんだ。

戦の邪魔をする者は襲つけれど、戦はあやまって煽るんだ。憎しみのオーラを振り撒いて」

「じゃあ、戦って人間のせいではないの?」

「人間のせいだよ! あの害獣は人間が生み出したもんだ!」
何だか、全然楽しくならない新発見をして、三人は鉛みみたいな気持ちになった。

その時…! 飛び損なった投石が近くの屋根に直撃した。石の破片がこちらに向かって飛んで来る。

「ひゃあっ」

だいちゃんと風すっかは横っ飛びで物陰に非難した。

ガガは…?!、路地脇から手が延びて、引っ張られた。

「鈍くさいなあ、あんた、本当に鶯の妖精か?」

助けに来た相手に助けられていた。

「あっ!」

ガガは、馬の引き綱を離してしまっていた。慌てて戻りかけるが、

「危ないっ!!」

街中に侵略者の騎馬が雪崩れ込んでいた。小さい草の馬は、

騎馬に驚いて、駆けて行ってしまった。

「踏み潰されるぞ!!」

「だって…馬が!!」

「大丈夫だ、あんたの馬だろ、信じろ、必ず帰って来る」

あちこちで火の手が上がった。だいちゃんや風すっかともはくれてしまった。

「こっちだ!」

少年はガガの手を引いて、鎖をガチャガチャいわせながら裏



路地を器用に駆け抜け、一つの建物の半地下の扉の前にとどり着いた。いつの間にか手にしていた鉤棒を振り上げて、錠前を叩き壊す。

「待たせたな、みんな!! 逃げろ! 固まらないでバラバラになって逃げるんだ!!」

中には、少年より小さい子供や、女の人がいた。多分、さっき言っていた、一緒に捕らわれていた仲間だろう。

みんなが感謝の言葉を述べながら走り去った後、ガガはそっと聞いた。

「あの、貴方、今日の襲撃、もしかして、分かっていたの?」
「ん? まあね。どこの部族かは知らんが、こっちは有り難かった。あいつらがさっき飛び出したから、何かあると思ったのさ」

少年は階段を登って空を見上げた。

「貴方、あの…あの、赤い狼も見えるの?」

「うん、あいつらが何なのかは知らないけれど、物騒な事が起こる前はいつも騒ぎ出すんだ。おおーっ、今日は一段と派手だねえ」

ガガはこの少年が豪快過ぎて、空恐ろしくなった。

「わい」

「……？」

「あんた、この鎖、その鉤棒で壊してくれる？」

「あ、う…うん！ んん…！」

「なに？」

「……ワタシ、あんたじゃなくて、ガガ！」

「あは、ごめんごめん、じゃあ、頼みます、ガガ」

街の中央の広場で、草の馬がオロオロしているのを、これまた皆からはぐれただいちちゃんが発見した。

「やばい！！」

上空の狼の何頭かが、異種族の馬を見咎めている。

「隠れるんだ！ そんな目立つ所にいちや駄目だつては！」

だいちちゃんは引き綱を引っ張ったが、馬は主人以外に引かれるのを嫌がって踏ん張る。

狼達が赤い口を舌なめずりして、馬に向かって飛んできた。

あんな爪にかかったら、草の馬なんかバラバラにされてしまつ。

「あーっ！ もっっー！」

だいちちゃんはヤケクソで馬によじ登って、ガガがやっていた

みたいに横っ腹をドンと蹴った。

馬はいきなり立ち上がって、真上にバヒューン！ と跳んだ。

すくそこまで迫っていた狼達は、馬の元いた場所で激突し合う羽目になった。

風すっかは、地味な作業をしていた。

風すっかの側を通った奴隷の子供達は、いつの間にか鎖が切れていたたり、飛んできた矢がそれたりという『幸運』を享受していた。

「まったく、このボクが、こんなに人間の為に骨折るなんて！」

火勢の強くなった建物が崩れ、下で小さい子供達がすくみあがって抱き合っている。

「まーったくっ！」

風すっかの起こした竜巻で、落ちてきた瓦礫は四方に散った。

「あ…ありがとう！ 小さい妖精さん」

「ほお、見えるのか。じゃあ、あんたらの大将知らない？ イ

エスゲイ・ハートルの息子」

「あっちよ。さっき、私達を逃がす為に、剣を抜いて兵士に立ち向かって行つたの」

「ありがと、生き延びろよ」

物騒な事になっているみたいだ。

* * *

「俺って人気者なの？」

「フザケてないで！ さすがにこれはヤバイでしょ」

イエスグレイ・バートルの息子がいる！ 生け捕りにすれば大

手柄だぞ！ 兵士が続々集まって来る。

隠れているこの物陰が見つかるのも時間の問題だ。

「有名な親父を持つと苦労するよ」

「ワタシが竜巻を起こして突破口を作る。走れる？」

「……じつかな？」

少年の足を縛った布がみるみる真っ赤になってゆく。さっき、小さい子を庇った時、斬られたんだ。

「……………」

「今の内に逃げるよ。いくら姿が見えなくても、危ないぜ」

「そうは行かないわ。貴方を長の所に連れて行くまで」

「だからさ、俺に何を期待すんの？」

「……じつしたの？ さっきまで自信だったぶりだったじゃない？」

「俺がテンション上げて行かないきゃ、みんな希望を無くすだろう。

みんな逃がしたし……もう、いいや……」

「……………」

「逃げな。こいつら、俺を殺しはしないから」

「……………」ナンカ…シナンカワタシナンカワタシナンカ…」

「お、お？」

「ワタシなんかチビで味噌ツカスで、勉強は出来ないし飛びのも下手だし、罰則チャンピオンだし鈴は落とすし馬は逃がすし、それでもそれでも一生懸命生きているのにい〜!!!」

「…は…はい？」

「貴方みたいに、強くてカッコ良くて豪快で、泥の中で輝く太陽みたいな人が、そんな簡単にへこたれないで下さい！」

少年は面食らったが、妖精の少女が彼を励まそうとするあまりテンパってしまっているのが、やっと二人を見つけた風すっかには、よく分かった。

「お取り込み中すいません。ボくら二人の力を併せて、敵の馬を一頭奪うってのはどうですかあ？」

カ方は真っ赤になったが、すぐ立ち上がって、風すっかの計画に乗った。

二人で、単独でいる騎馬の両側から近づいて、耳にふーっと息を吹き込んだ。馬がびくくりして兵士を落っことした所で、

ガガが手綱を取って、風すっかが兵士の兜をクルリと回して目隠しした。

すぐに馬を少年の所に連れて行って馬上に引っ張り上げ、後は二人で前方を竜巻でかき分けながら疾走だ。

「どけどけどけー!!」

人垣を突破した!

しかし外の広場には、さっきの十倍以上の騎馬兵がびっしりとした。竜巻で蹴散らせる数じゃない。少年は剣を抜いた。

「危ないからもう離れて…。有難うな、ちっこい妖精達、忘れないよ」

——その時!! ——

「あ・あ・あ・あぁぁぁーっ!!」

草の馬がだいちゃんを背中にくっつけて…乗っけてるといふより、くっつけて…、上空から凄い角度で突っ込んで来た。こ丁寧に、炎の狼付きだ。

草の馬は、地面スレスレを火花を散らせながら引っ掻いてから急上昇した。追いかけてきた狼達は、地面に激突して、ネズミ花火みたいに派手に砕け散った。

それらは全て人間には見えない。けれど、馬達を大パニック



に陥れるには充分だ。たちまち兵士を振り落として逃げ惑う。

草の馬はだいちゃんの死にそんな悲鳴を振り撒きながら、何回も地上と上空を往復して、大騒動を引き起こした。

「だいちゃんナイス…」

風すっかが半笑いで呟いた。

少年の馬だけがぼつんと落ち着いていた。ガガが馬の耳元で小さく何か呪文を囁いているからだ。

何回目かの急降下の時、ガガが飛び付いて愛馬を制御した。

頭の上にヒヨコがヒヨヒヨしているだいちゃんを風すっかに託して、少年を乗せる。

「怖かったね、ごめんね…、もう少し頑張ってるね」

愛馬の首に頼ずりして、少年の前に乗り、手綱鞭一閃、上空に駆け上がった。

「うわっ凄い！」

少年は怪我も忘れて興奮した声を上げた。

「ああっ駄目！ 上がり過ぎだ！」

地上の風すっかが叫んだ。不気味に城壁を旋回していた赤い狼が、一斉に反応して向かって来た。

二人乗りの草の馬じゃとても逃げ切れない。後ろを見て、す

べてを悟ったガガは、少年の手を取って手綱を握らせた。

「お、おい、あんた、ガガ…?」

そして、愛馬に一鞭かれて、自分はフワリと飛び降りた。軽くなった草の馬は加速する。

ワタシは風のあるから落ちてでも大丈夫なはず…だけど…、ち、ちょっと…、高すぎたかしらあぁ………!

——ざざあっ!!

下と横から風の塊が二つ飛んできて、落ちる妖精を受け止めた。ガガの体は一瞬浮いて、くるくると回りながらゆっくり地面に落ちる。

——ぼん!!

今、何人がワタシを護ってくれたのだろうか？ こんなドジなワタシを…。

一人は風袋と一緒に下敷きになっているこのヒトだ。

「痛ったあ〜」

柿ただちゃんが鼻血を出しながら、ガガを見て、ニカッと▽サインをした。

——ヒューン!ヒューン!——

銀の矢が、流星群のように降り注ぎ、狼を怯ませた。



翡翠(ひすい)色の光が夜空を二分し、風の末裔の一族が大
隊となって、天駆けて来る。

先頭は、群青色の髪をなびかせ、緋威(ひおとし)の鎧に翡翠
の剣を携えた、蒼の長だ。

長の馬は明らかにシベルの違つ風をまとい、たてがみと蹴爪
から鬮牙(とつき)を立ち上らせている。

「うわあ……」

風すっかは、ここは戦場だって事も忘れて見入っている。

「ボクは自分の一族を誇りに思っているよ。でも、今ちらりと、
こっちの一族に生まれたかったあ……って思っちゃった」

「無理ないよ……」

だいちゃんは、沢庵大根のぶら下がった茅葺き屋根の縁側で、
猫を膝に乗せて日向ポッコしている白眉じいさんを思い出した。
あれはあれで好きなんだけれどね。

蒼の長が一騎駆けて抜け出し、少年に追いついた赤い狼を雑
払った。

「無事ですか？ イエスグレイ・バートルの子息殿？」



少年を庇いながら、宣詞のりごとを唱えて剣を一閃、十数匹の狼が一度に粉々になった。

「俺は大丈夫だけど、あのチビッコイのが…」

地上を見ると、鼻血を出した柿ただちゃんと並んで、ガガも元気に手を振っている。

「よかった…、もう、俺を助ける為に誰かが犠牲になるのは御免だ…」

長は痛ましい顔で少年を見た。

蒼の一族の精鋭部隊が追いついて、前列に出て二人を衛る。

「俺に馬、貸して貰えませんか？ この馬、チビっ子に返さなきゃ」

「子息殿には馬車の用意がありますが？」

「俺は馬と共に草原に生きる、ウイグルの民ですよ」

「…そうでしたね」

少年は、後方から引かれて来た草の馬に乗り移り、脚の傷を縛り直した。頑張ってくれたガガの小さな馬の首筋を軽く叩いて労う。

「有難うよ！ 主の所に帰りな！」

小さい馬は、ガガの元に一直線に駆け下りた。

「長!!」

前列で闘っている兵士が叫ぶ。

「こいつら…!!」

赤い狼は倒しても倒してもキリがない。戦場の上空で人間の憎しみを吸い上げて、どんどん増えているんだ。

「父上…いや、前の長に聞いた事がある。人の世が乱れる時、赤い狼が空を埋めると。これは人間の責任だ、子息殿は救出した、我々は退こう」

長の言葉の中に、少年の心の琴線に触れる箇所が二つあった。

「蒼の長!!」

「どうされた？ 子息殿」

「人間の責任と言いましたね。では、あの狼の始末は、人間の俺がつける！」

「そんな…、無茶な。貴方がそんな事を背負う道理はない」

「このままじゃ下で闘っている人間は、狼に煽られて敵も味方も全滅するまで争い続けるよ」

「それは…」

「仕方のない事だって言うのか？ 俺はそれで済ませたくない。あの憎しみの狼を人間が生み出したのなら、人間に制する事も出来なきゃ。でないと、人間ってあまりにも救いが無いじゃな

いか!!」

蒼の長は衝撃を受けた顔で止まってしまった。その場の蒼の一族も、皆一様に、少年を凝視する。

「…わかりました。しかし、どうやって?」

「俺一人で行きます。でも一つ協力して欲しい」

「可能な事なら何なりと」

「長の馬と剣を貸して」

「え?!、えええっ!! そ、それは…!」

「ハッターが必要なんだよ。こんな奴隷の格好じゃ、あんまりだ」

「し、しかし、我々の掟では…」

「臨機応変って言葉も掟に組み込んだら? あのチビツ子は俺に馬を渡して、自分は空から飛び降りたんだぜ。それも罰せられるのか?」

それでも躊躇している蒼の長に、少年は顔を近づけて、何やらポソポソ耳打ちした。途端に長の顔色が変わった。

そして……、少年は闘牙の馬に跨り、翡翠の剣を掲げ、つい

でに緋威の鎧も借りて、最前線に躍り出た。

少年は、襲い来る狼を翡翠の剣で蹴散らしながら、城壁の真上の赤い狼の群塊に、単騎突っ込んで行った。

「どうなっているの!」

地上で、事情の分からない柿ただちゃんが叫んだ。

「彼を救出するのだけが目的じゃなかったの?」

風すっかがガガに向き直った。

「わからない、でも……、何か、あのヒトらしい!」

ガガは陶然とした顔で答えた。そして自分の馬の鎧(あぶみ)を降ろして、緩めていた腹帯を締め直した。

「どうするの?」

「ワタシが何か出来るって訳じゃないけれど、あのヒトを…、

そう、独りであんな所に行かせたくない」

「えーっ? 何か考えがあって行ったんなら、足手まといになるよ」

「ううん、あのヒト、責任感が強すぎて、自信たっぷり振り

をする癖がついてしまっているの。本当は、とてもとても怖い

筈よ。だってまだ子供じゃない!!」

いや、ガガだって子供だろ…と突っ込みたくなったが、少年

の初対面からの態度を思い出すと、彼女の言う事は真実を突い

ているように思えた。

ガガが草の馬に跨って空に駆け出した。と、馬のお尻からよっこらしょ、とだいちゃんがよじ登ってきた。

「だいちゃん…」

「怖いのはガガちゃんだってそうだろう」

風すっかと柿ただちゃんも風袋にタンテムで上がって来た。

「一緒に行こう、怖いのは四分の一に、勇氣は四倍になるよ」

翡翠の剣は破邪の光を放つ。駆け込んで来た少年に狼達は怯んだ。

しかし相手がただの人間だと分かると、牙を剥いて取り囲んだ。

「聞けーっおまえらーっ!!」

少年は剣を掲げたまま、腹の底から一喝した

「お前らそんなに面白いか？ この人間を滅ぼして、また次の獲物を探して滅ぼして！ そんなチマチマやってたって、お前らいつまで経っても満足出来ないぞ!!」

狼達は躊躇しているが、牙を剥くのはやめない。

叫んでいる間、少年の目は、狼の間を自まぐるしく見回した。



雑魚じゃ話にならない。頭を見つけないでは…。

「俺が…、俺が！ お前等に『満足』を与えてやる!!」

狼達が分厚く群れている奥に、一際大きく、存在のはっきりしている狼を見止めた。こいつだ…!!

少年は親玉狼の目を真っ直ぐ見て、続けた。

「俺は、この土地の…、いや、この世界のハーン、『大王』になる!! 俺と共に来い！ 俺にその力を使え！ 今よりもっともっと面白い世界を見せてやる！」

丁度その時、少年に注意が向いている狼達の側まで、ガガ達の草の馬と風袋がたどりの着いた。

「何を言い出すんだ、ぶっ飛んでるよ」

風すっかが呆れたように言った。

「油断させて、隙を作らせて、親玉を倒すつもりかしら？」

と、柿ただちゃん。

「ううん、そんな姑息な事、あのヒトの脳ミソには入っていない。多分、本気で、真っ正直に、言っているのよ」

「……………」

だいちゃんは、短時間でガガにここまで理解されている少年が、ちょっと羨ましくなった。

「あんなのに狼は応じるの？」

「そもそも狼の目的、価値観って何なのかによるよ」

風すっかが、記憶をたどりながら言った。

「新渦風すっか族に伝わる話では、戦場の魔物な奴らの価値観は…」

「価値観は？」

「面白いか、つまらないか。好きか、嫌いか」

「なんだそりゃ？」

親玉狼は、少年に多少興味を持った感じでねめまわす。そんな事を言い出す人間は、多分初めてだ。

しかし、遂に緊張に飽きた一匹が、後ろから少年に襲いかかった。

「テムジンさん！ 後ろ!!」

——?! 叫んだのは、柿ただちゃん——

少年は振り向きざま剣を一閃、短気者を蹴散らしたが、それをぎっかけに狼達は一斉に少年に襲いかかった。

「————!!!」

親玉狼が、怒りの炎をくすぶらせながら、勝手な行動をした幻影どもを一蹴していた。

少年の両側には、風袋と草の馬が割り込んで、二人の小さい妖精が精一杯の竜巻を起こしていた。

「あれえ…、チビツ子、俺、あんたに名前教えたっけ？」

少年は柿ただちゃんに軽い感じで言ったが、その声は震えてうわすっていた。…やっぱりガガちゃんの言った通りだった…。

しかしピンチは変わらない。

精一杯ハッターリをかまして乗り込んだ少年の両脇に現れたのは、チンケな竜巻しか出せない子供の妖精二人と、泥団子を構えた柿の精と、高さが怖くて馬のお尻にしがみついている謎の生き物だ。

…思いつきの逆効果じゃん!!

ところが、親玉狼は、現れた四人に興味を示して、まじまじと見つめた。

ここで、蒼の一族の精鋭部隊でも現れたら、闘いになっていたかもしれない。しかし、少年のピンチに飛び込んだのは、どう見たって助けにならないチビツ子四人だ。

あまりにも予想外だ。そして、攻撃する気をなくした自分がいる。

理解できない…。

わからない…。

わからないから……面白!!

地上で争っていた人間達は、憎みすぎて憎みすぎて、疲れ果てていた。そんな時、その少年が空から降りて来たんだ。

光輝く翡翠の剣を掲げ、鬪牙をまとった天駆ける馬に跨り、おまけに炎の狼まで従えているんだ。そりゃ、神の子、救世主って思うでしょう。

兵士は闘いをやめて、それまでの君主を見限り、救世主の元に集う事となる。

普段は見えないはずのモノを人間に見えるようにしたのは、ガガの術だ。いったい一晩でどれだけの突破りをしちゃったんだ？

「もう、数える気にもならないわ、向こう半年位は罰則づくめね」

ガガは軽く言った。だいちゃん達三人は勿論、彼女の罰を分担する心づもりだ。

朝が来て、蒼の一族は地上に降り立ち、馬を休ませたり、怪

我をした者の手当てなどをしてる。

「罰則喰らうってのも悪くはないんだぜ」

蒼の長に剣と鎧と馬を返しながら、少年がガガに言った。

「要領悪いもんの方が、頑張れるし、人の痛みも分かる。案外、今、人の上に立っている奴が、子供の頃は罰則チャンピオンなんて事も……」

「イエスゲイ・バートルの子息殿！」

長が何だか慌てて遮った。

「我が里には来られぬのですか？」

「ああ、これでも隠れて待っていてくれた仲間がいるんだ」

「父う……前の長の話など、聞きたかったのですが……」

長と少年の話になると見て取って、ガガはすうっと自分の馬の所へ戻って行った。その後ろ姿を振り向いて、少年は小声で囁いた。

「……あのチビツ子の罰、割り引いてやってよ。長も俺に馬を貸してくれたんだ」

「それでは他の者に示しがつきません、私も罰を受けます」

少年は額に手を当てて首を振った。

「それを言うなら、親父のダチの方が大きい罰を受けなきゃな」

「ダ、ダチ……？」

「そう、親父、昔よく、俺達家族の住んでいた所に、夜中、いきなりやって来たんだ。ダチに借りたんだって嬉しそうに、空飛ぶ草の馬に乗って」

「えっ？ ええっ？」

「んで、兄弟順番に乗っけてくれたり、…俺の記憶違いじゃなけりゃ、この馬だったぜ！」

「ち、父上……!!」

「あは、やっと言った。いいじゃん、父と呼んで。あんだ、もう小さい子供じゃないんだ」

「……………」

「お互い、大変だね……」

「そうですね……」

二人は静かに笑って握手した。

「柿ただちゃん、彼の名前、長からでも聞いていたの？」

「だいちゃんが、ガガの馬の体を擦こすってやりながら聞いた。」

ガガは、自分も聞いていないあのヒトの名前を、先に柿ただちゃんに呼ばれたのがちょっぴり複雑な気分で、黙って馬に水

をくれている。

「…？ 知っているでしょう？ イエスゲイ・バトルの名前

が出た時点で、普通に出てくる名前よ。ね、風すっか」

「いや、ボク、分かんなかった。柿ただちゃん程マニアック雑学ないし。柿ただちゃんが名前を呼んで、初めて納得したよ」

「二人で納得しないでよ〜！」

「だいちゃん！」

柿ただちゃんが困り顔で、だいちゃんとガガを交互に見た。

「ワタシはあのヒトの行く末なんて知りたくない。分かっているもの、あのヒトならどんな未来だって切り開けるって」

だいちゃんは、自分の考えの足りなさにしゅんとした。大好きなヒトの行く末を、自分の友達には分かっているって、どんなに複雑な気分だろう？

「ね、帰りに私も草の馬に乗せて」

空気を交えるように、柿ただちゃんが明るく言った。ガガは

「ニッコリ頷いて、馬に鞍を置いた。

「あ…、長…」

蒼の長が目を細めながら近寄って来た。

いつも内気で無口なこの子供が、外国(とつく)にの三人と打

ち解けて笑顔でいる事が、なんとも嬉しいのだ。

「これをお三人にお返ししておこう」と

彼の長い指には、一番最初に拾った鈴があった。

「別世で落とした子供が困っているわ」

「ふふ、いつの世にもガガちゃんはいるのね」

柿ただちゃんの言葉に、一同は笑いながら鈴を受け渡した。

——ちり…ん……——

三人の前からすべてが消えた。

長も、蒼の一族も、草の馬達も……ガガちゃんも……。

三人は、一番最初の草原の真ん中に、突っ立っていた。

「早すぎるよ……」

だいちゃんはムキになって、鈴を小刻みに振るってみた。

チリリリリリリ…

どんなに鳴らしたって、もう過去には戻らない。風すっかと柿ただちゃんも、打ちひしがれた顔だ。

「さよならも言えなかった…」

「あんまりだわ…」

ブルル……、小さな息づかいに振り向くと……。

「ガガちゃん!!」

空色の髪の子供が、目を丸くしてびっくり顔をしている。

よく見ると、ガガよりはだいぶ小さい子で、着ている物の意匠も少し違う。

小さな草の馬を連れていて、ほっぺに泣きベソの後が幾筋にも付いていた。馬の首の皮飾りの紐が千切れて、大切な物をなくしちゃったんだね。

子供は、だいちゃんの手の中の鈴をじっと見ている。だいちゃんは、鈴を掲げてチリチリ鳴らしてみた。

君の? と先に聞いて失敗したんだ。相手が喋るまで待とう。しかし子供はもしもするばかりだ。スティックなのは伝統なのか?

こんな時、なんて喋ればいいんだろう? こう、スマートに……、あ、思い出した!

「やあ! あんた、蒼のイチソク?」

明るく言おうとして、声が裏返ってしまった。風すっかが吹き出した。柿ただちゃんはひっくり返って呼吸困難になっている。

子供は緊張が少し解けて、大真面目に、

「はい、僕、蒼の一族です」と答えた。

「これ、探しに来たんだろ」と、風すっか。

「なんも悪さしないよ、受け取れよ」と、柿ただちゃん。

そして三人は大笑いした。笑い過ぎて涙が出て来た。

子供はこの三人が何でこんなに笑っているのか、分からなくて困り顔だ。

たった一度の会話を、何でこんなに鮮明に覚えているんだろう?

彼(テムジン)だけじゃない。ガガちゃんとの出逢いも、蒼の長との出逢いも、まだ三人の中で息づいている。

もう、絶対絶対逢えないけれど、絶対絶対なくなるなら、大切な思い出だ。三人は少しだけ哀しいのが治まった。

「あの……」

子供はやつと言えた。

「それ、僕が落としたんです」

「あ…、ああ、そうよね」

受け取れよ、と言っておいて、なかなか返してくれないんだから、まるで意地悪なヒトだ。

だいちゃんが鈴を渡し、柿ただちゃんは裁縫道具を出して、

千切れた所を補修してあげた。

「おーい…」

遠くから声がして、青色の髪の子供が何人か現れた。

「鈴、見つかったんだ？」

「よかったね、他の子にも知らせて来る」

大勢で鈴探しをしていたらしい。みんなの馬の鈴も、お揃いの同じ模様だ。

「なくし物の罰って、一人で捜さなきゃならないんじゃないの？」
「たの？」

「うん、でも、『友達』なら手伝ってもいいって決まってる」

「いつから？」

「もう、ずーっと昔からだよね」

何でそんな事聞くのかって顔で、子供達は答えてくれた。

「…ねえ、草の馬に乗ってくれない？」

柿ただちゃんの、唐突発言だ。

「ちょっと、柿ただちゃん…」

「だって乗り損なったんだモン」

「うーん…」

「駄目？」

一番大きい子が進み出て言った。

「『友達』なら後ろに載せたり、貸したりしてもいい事になってるんです。だけど、貴方は会ったばかりだし…」

「そう、じゃ、友達になれるよう努力するわ！ ふふふ…」

何をどう努力するんだろう…？

「あのね、こっちのヒトが鈴を拾ってくれたの。んで、このヒトが皮飾りを繕ってくれたの」

「そうか、じゃあ、客人だな。落とし物を届けてくれたヒトは大切にてもなすって伝統があるんです。急がなかったら、どうぞ、蒼の里に来て下さい」

「ぜーんぜん、全然、急がないわ」

「先に戻って長に報告しておいて」

言われて、一番目に大きい子が飛び立った。

「長!!、長がいるの？」

「そりゃあ、いるでしょう、普通…」

「若くてカッコイイ長？」

「僕のお爺ちゃんだよー！」

最初の子が少し打ち解けて言った。

柿ただちゃんは失礼な位がっかり顔だが、風すっかも心密かにがっかりした。

「よし、じゃ、一人つつ後ろに乗って下さい。遅れるなよ、ガガ」

「???!! 貴方もガガちゃんっていつの?」

小さいガガは不思議顔で頷いた。

「びっくり…、まあ、蒼の一族の子供の名前は使い回しらしいから、ガガちゃんはその時代にもいるんだろ」

「ええ、でも、『ガガ』って、長の家系の子供の名前です」

「え……?」

三人はすぐ飲み込めなくて、茫然としたが、色んな事が頭の中で辻褃合って、少しづつ納得した。

あの日、赤い狼に追跡された柿ただちゃんは、念の為、真っ直ぐ住処に向かわず、シグザクに飛んだ。結果迷子になってしまった。だいちゃん達には内緒にしているけれどね。

そして、何故か、草原の上空で、馬に乗った蒼の長に出くわしたのだ。

「客人の心配をしていただけ…、なんて嘘。ガガちゃんを心配して、そっと里を抜け出したんだわ」

「ガガちゃん、どんな大人の名前になったんだろうね」

そんな事を言いながら、草の馬達は住処に向けて飛び立った。だいちゃんは、やっぱり空には馴じめなくて、情けない顔で馬にしがみついていた。

——エピソード——

地平線が薄紫に白んでいる。もう白夜の季節だ。夜露に濡れる草原を、ガガは自分の馬を引いてヒタヒタと歩いてきた。紫紺の空には泣きたくなる程の満点の星。この星々が消える頃には、みんな置き手紙に気付くだろう。

『あの騒動』から三ヶ月かけて、ガガは一晚で犯した膨大な突破りの罰則をこなした。

手伝ってくれると言った友達三人は、時の神サマが連れて行ってしまったから仕方がないわ…、でもちょっと大変だった。

……うっん、これからの自分もっと大変な道を選んでしまった。今は自分の正直な心に従おう。

丘を登りかけた所で、星空を背景に、一頭の馬と背の高い人影が佇んでいた。

「……………長……………」

「こんな夜中に、住処を抜け出して。まったく、貴方は……」
言っている言葉と裏腹に、蒼の長には咎める感じが無い。

「すみません、長……。でも掟破りはこれで最後です」

「どうしても貴方が行かなくてはならないのですか？」

「ワタシが行きたいのです。ワタシの気持ちが見届けたいのです。多分、赤い狼と同じ気持ちかもしれない」

「それだけあの若者がヒトを惹きつけるという事。それは私も分かります。現に、今や続々と、草原の各部族が、彼の元を集まっているか」

そういう噂を聞く度に、この少女が切なきような顔をするのを、長はちゃんと知っていた。赤い狼を背負ってしまった少年は、一時も立ち止まれないのだ。

だから……だから、カガはいても立ってもいられない。側に行つて、彼の身を護りたいのだ。

長は頭を垂れたカガの草の馬を見やった。

「鈴は置いて来たのですか？」

「勝手に一族を抜けるんです。もう風の末裔は名乗れません」

「飛べない貴方が彼の元に行つて、役に立てるのですか？」

「……ワタシにやれる事をやるだけです」

長は自分の馬に歩み寄つて鈴を外した。驚きで硬直しているカガの前で、その鈴を彼女の小さな馬に付け替える。

大人の馬の鈴を与えられた馬は、金砂のような光を振りながら、一回り大きくなった。

「……長……?!」

「少し早いかもかもしれませんが、貴方はもう子供ではありません。

名前も与えましょう」

「長……、ワタシは……、自分勝手な気持ちだけで行くのです……、

ワタシは………」

「死んではいけません」

「………」

「今から貴方に課せられた掟はそれだけです。貴方はいつかあの若者の為に命を投げ出してしまえばいいので、それだけが心配です。貴方が自分の身を護れるように、掟に準じて鈴を与えます。そして、いつか、彼が貴方の意志と運命が交わる日が来たら……、

ここへ戻つて来るのです。分かりましたね」

カガの空色の瞳から、つと涙がこぼれた。

「貴方はこれから一つ処に留まらない自由な風となります。憎しみの赤い狼と対峙した者、慈しみの『蒼の狼』と名乗りなさい」

「……懐んで…お受けします…」

遙か中天でけぶっている天の川は、光の道のように白夜の地平に伸びていた。

夜明けはこの先にある。

〜おしまい〜

二〇〇九・五・三一



